
Frere

七転八倒

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fre re

【Nコード】

N 2 2 0 6 V

【作者名】

七転八倒

【あらすじ】

何時もと変わらぬ毎日。

堅実に一步一步自分の生活を守る弟、停滞を嫌い常に高みを目指す兄。

会社跡取りとして平和で、平凡な毎日。

過去の遺物とかした、日本兵士として戦場を駆ける毎日。

そんな兄弟に悲劇が起こる。

それは定め、それとも運命。

テロが引き起こした異次元ファンタジー。

始まり

始まり

その時俺自身に何が起こったか分からなかった。

いや、分かりたくなかった。

結論から言おう、俺は死んだ。

その日、俺はいつも道理目覚まし替わりにセットしたテレビの声で叩き起こされた。

『おはようございます、本日の天候は晴れ。過ごし良い一日になるでしょう』

「……………」

朝五時半、眠い目をこすり八割寝た頭で洗面所に向かう。

「ドウウウ……」

何も考えず日頃の習慣で身に付けた、条件反射的な洗面等々。

「ああ、眠む……」

ほぼ何も考えず取り敢えず仕事着に着替え、そのまま家を出る。駐車場に停めた愛車に乗り込み、エンジンスタート。聴いているのかいないのか、ただ鳴らすだけの音楽。

途中コンビニにより朝食を購入、やっとその辺りで眠気が抜けて来た。

再度車に乗り込み会社へGO、

うむ、やっところ頭が回って来たZE、

そして会社の駐車場に車を停めると。

「おはようケンちゃん」

「あ、おはようございます出口さん。今日は一緒ですかね？」

「いやまだ見てないから分からないよ」

「それじゃあ、ちよつと見て来ます」

朝も早くから待機している仕事仲間達に挨拶を送りながら、事務所へ。

まあ、事務所と言ってもプレハブ小屋だが。

「おはようです。今日どこつすか」

「おおおはようケンちゃん。今日は人が多いけど大丈夫かな、昨日と同じだから」

そう言つて事務所のおいちゃん、営業の田上さんから名簿を貰う。

「ううゝす、ほんじゃ行つて来ます」

「気を付けて」

そう言つて事務所を後にすると、もう既に我が愛車に道具を詰め込む従業員の姿が。

「あつ、おはようございますケンさん」

「「おはようございます！」」

「おう」

因みに俺の仕事は大工だ。

大工と言つても家を建てるばかりじゃなく、解体やセメント打ちもやる。

俺は今日連れて行く面子にそれなりの挨拶を交わし、車に乗り込む。まだ朝飯前食いおえつてねえし。

メシを食いながら待つていると、助手席に出口さんが乗つて来た。

「うんじゃ今日も頼むねケンちゃん」

因みにこの人は、俺に大工の仕事を教えてくれた一人で有る。

そうこうしていると皆乗り込んで来たようだ。

「ほんじゃ、行きますか」

そして、いつも道理の一日が始まった。

現場に向かう途中、ラジオから国際問題のニュースが入つて来た。どうもまたテロが有つたらしい、好きだねえ。

「そついやお兄ちゃん、元気にしてる？今海外の軍隊でしょ」

「ああ兄ですか。まあぼちぼちやってんじゃないですか」

「凄いよねえ、自衛隊の特殊部隊辞めて海外の軍隊。なかなか出来ないよ、奥さんも言ってたけど」

「まあ、兄貴は停滞を嫌いますからね」

そう、俺の兄貴はわざわざ自衛隊で現場一本叩き上げて特殊部隊に入るも、所詮自衛隊とせつかく手に入れた地位を捨て。

本物の兵隊になるとフランスに飛んだ。

まあそのせいで、向こうの軍警にテロリストと間違われ大変だった見ただけど。

確か今はテロリスト相手に作戦中だったかな、m・x・iで言ってたっな。

そうこう言っている間に現場に到着、今日も一日頑張りましょう。

死後

死後

そして、カウントダウンが始まった。

今日の仕事は、新しく出来た新幹線駅構内の最後の仕上げ。

本当ならウチの会社が入るトコじゃ無かったけど、いろいろあって
応援で入れたらしい。

そのまま午前が終わり、昼に入ろうとしたその時。

「おっ！頑張つとるか次男」

「なんや、かあちゃんかよ」

「昼メシ持つて来てやったぞ、出口達とは別で食べよ」

「あいあい」

職場でしかも現場までくんなよ。

そう思っていると、ほかの奴らも集まって来た。

「あつ、奥さんお疲れ様です」

「えつ、専務。お疲れ様です」

「おう、ちゃんと真面目に仕事しよろうね、あんた達」

「大丈夫ですよ、ケンちゃん二代目ですから真面目にしていますし」

「はい、ケンさんに迷惑かけないようやってます」

「そいないよか、あんた等もはようメシにしんしゃい。私も社長様
と帰るから」

そう言い残すとともに歩いて行くお袋様、相変わらず台風の様な
人だ。

今日は父さんと挨拶にでも来たのだろう。

さて、俺もメシ。

そう思ったその瞬間、ズンと響く衝撃波。

そして、一気に崩れさる足場のコンクリート。

あり得ない、何が起こっているんだ。

日本の技術力で作られた建築物が崩れさる、そんな事が有るわけが俺は認められない現実と共に、崩れたコンクリート壁ごと落ちていった。

そして、俺の意識は消え去り。

黒煙と数多のコンクリートが散らばる災害現場。

そして、

今俺はそんな現場を空から見つめていた。

聴こえるのは戸惑いと叫び。

そして、

電波ジャックしたテロリストグループによる宣誓。

訳が分からず、理解し難く、何も考えたく無い。

いつしか俺の身体は光の粒子となり、霧散していった。

二回目

二回目

「はっ!!」

俺は、いったい。

混乱する意識の中、俺は跳び起きた。

「…ココ何処？」

見渡せば古いロッジの様な、もつと言えば荒屋風の部屋。
薄い木の板と、それをくり抜いた様な窓。

「…何つつか、何処ぞの避難小屋か？」

良く言えばキャンプ様のロッジだろうが、あまりにお些末過ぎる。
取り敢えず家の形をした廃材だな。

「本当何処よ、つつか俺生きてるし。…なして？」

いや、アレがマジなら確実に逝ったしよ。

でもよう……

俺は取り敢えず立ち上がり、身体を点検する。

まず第一に、何この超質素な服。

森ガールもびつくりだよ、超天然素材、なんか土嚢袋見たいな素材
何ですが。

つつことは……

Oh shit

下着のパンツ、Ths HUNDOSHI

分かります、日本の心ですね。

「こんな兄貴しかはかねえし!!」

しかもゴワゴワって何よ！何なのよ！

俺が頭を抱え悶え苦しんでいるその時、後ろの板。

おそらく、引き戸が開き誰が入って来た。

「あ、起きたんだ。おはよう」

いきなりの声に岩つちもビックリな捻りで振り返ると。

「……誰、テメエ」

そこには決して見た事も、そして知り合いにもいない幼女。

「あはあ、テメエってイキナリね。まあいいわ」

若干引き笑いプラス青筋を浮かべた幼女、何度でも言おう幼女がいる。

髪は金髪、ちよいときつめだがアーモンドのような目、色は青に近い。

肌はそこそこ白いが、アジア系だな。

身長は140くらいで、洗濯板。

服装は何処その魔術学校の制服の様な。

「嬢ちゃん、その年でコスプレはあかんて。親泣くぞ」

俺はその嬢ちゃんを頭の天辺から爪先まで観測し、適切なアドバイスを送ってやった。

しかも大真面目な顔で膝お折り、目線まで合わせてやった、なんて優しい俺様。

今全俺が歓喜に湧いている。

どうやらその興奮が幼女にも伝わったようで、肩をゆるわせながら下を向く。

「気にすんなって、誰でも間違いわ有る」

その瞬間、幼女の可愛い口が三日月の様に笑い。

「誰がコスプレじゃい！こんボケガアア！！」

「安部氏！」

見事に捻り込まれた右ストレートが、俺の左頬を穿つ。

まさかこんなトコで出会うとは。

「…アンタ、良い拳だっ…たぜ、ジョー」

「はあっ！…またここかよ」

「どうでもイイから、早く起きてくれない」

「うゝす」

俺は硬い床から上体を起こし、あの幼女の方を向く。

ふむ、貴様だけベツトに腰掛けていやがりますか、そうですね。

「…あのね、だいの大人がそんなふて腐れた顔しないでくれる」

「はっ普通ですけど何か？」

「…もうイイわよ、話し進めても良いわよね」

「ああ、その前に状況を確認したいんだけど」

「その話もあるから、取り敢えず聞いて」

「うゝす」

俺は地べたに胡座をかき話を聞く、その話が本当かどうかは置いてだ。

この幼女コスプレイヤー曰く、俺はご都合主義の代名詞とも言える転生召喚系にまき込まれ、あまつさえこの幼女はこの世界での相棒らしい。

「…相棒ねえ。珍しい」

「結構すんなりと納得為るのね、普通もう少し驚くわよ」
俺はむくりと立ち上がり、少し身体をほぐす。

「いや、まだ信用してねえけど。取り敢えずはおいおい。ところで君の名前は？」

「ノイ・ツァイト。ノイでいいわ、彼方は？」

「俺はケンだ、取り敢えずよろしくノイ」

ニュース

ニュース

「クソ！クソが！」

「落ち着けナオ！今ここで暴れても何も」

「離せナキ！分かってる！分かってるけどよう！」

その日俺は、クソ胸糞悪いファツキンニュースのせいで、施設内の食堂で大暴れしていた。

ふざけた戯言を抜かすテレビに掴みかかり窓から投げ捨て、いまだ収まらねえ怒りを机や椅子を蹴り上げ、壁紙にこぶしを叩き付ける。拳の皮はめくれ、真っ赤な拳を振るい続ける。

痛みより、悲しみより、行き道理よりも、ただただ腹が立つ。

全てが、全てが憎い。

憎くて悔しくて、そして何より。

「何で死んでんだよケン！！」

その日俺の家族は消えた。

かかあもオヤジも、そして何よりも、何よりも。

弟が逝つちまいやがった。

憎い、憎い、そして何よりここに居る俺が殺したくてたまらねえ。

だがその前に、あのゲステロ屋共を根絶やしにしてやる。

そのニュースを見たのは、俺が早朝の任務から帰隊して直ぐの事だった。

俺の所属部隊は、フランス外人部隊パラシュート部隊。

今は任務のため中東に来ている。

任務は復興支援と大使館やフランス法人の保護、そしてアメリカ軍との合同任務。

今日も今日とてテロ屋に襲撃かけてのお掃除、最も一番始めに突入するのは毎回アメちゃん達何だけどね。

二、三ヶ月前、テログループの主導者がアメリカ軍の海兵隊により殺害され、新たな主導者が出て来た。

一時はこのテロとの戦いも下火となったが、向こうも主導者が殺られ仇打ちに躍起だ。

世界中どこでも爆発テロばかり、本当良くやるよ。

その日は昨夜から補給物品を積載したトラックのコンボイを警備しながら砂地の多い道を軽装甲車に乗ってひた走っていた。

「ナオ、お前この任務終わったらどうする？」

「そうやな、ナキがいったオクターフェスティバルに行きたいな。ビール、タダなんだろ」

「おおイイね、分かってんじゃん。ウチに來いウチに、歓迎するか」

装甲車の後部座席で今喋っているのは同期入隊のナキ、ドイツ人で元ドイツ陸軍出身だ。

俺より年下だが、武器や軍隊の話で良く盛り上がっている。

そして、もう一人。

「グローグも一緒にどうだ？」

「そうだな、考えとくよ」

彼も同期でアメリカ人。

元はスーパールの店員だったらしいけど、俺達同期の主席でNo.1。足も速けりゃ、泳ぎも凄い。

始めは対抗意識バリバリで挑戦しまくり、今じゃ良き友、良きライバル。

この後も酒や飲み屋のねーちゃん、最新の武器関係の話をしながら基地へと到着した。

その後警備していた俺達は解散となり、気付けば朝9時過ぎ。遅い朝食を食うため、食堂に向かう。

「ナキはコーヒーでイイか？」

「ああ頼む、俺はパンとって来る」

グローグは取り敢えず眠いといって部屋に返ってしまい、俺とナキ2人で食堂に来了。

付けっ放しのテレビが見える席で、適当にパンとコーヒーで朝食。

アメリカの大手ニュース番組をそれとなく見て居ると。

「…おい、食つまま寝るなよ」

手に持ったコーヒーのカップを落としてしまい、床にぶち撒けて仕舞った。

隣のナキが何やら言っているが、聞こえ無い。

俺は見開いた目のままフラフラとテレビに近づき、掴む。

後ろで見えねえだの何だの聞こえるが知った事じゃねえ。

そして、そこには日本語で死亡者の一覧が提示され、白い文字が並ぶ。

そこに、

「嘘だ嘘だ、ふうう嘘だああああ！！！！」

俺の、俺の弟の名前と両親の名前が無情に流れて行く。

修羅道

修羅道

その後俺は警務隊に連行され、営倉に放り込まれた。

面会に来た上官から、今回のテロの話を経験が聞かされた。

そしてやはり、俺の家族は皆逝っちゃったようだ。

その日仕事でそこにいた俺の家族は、トチ狂ったテロ屋が腐る程の爆薬や爆発物を積載したトラック数台で吹き飛ばしてくれたそうだ。奴らの発表では、安全大国日本においても我々はこれ程のテロを起こせるだと高らかに宣言しこれは聖戦だと吠えやがりましたとよ。

許されねえ、絶てええに許さねえ。

俺は薄暗い営倉の中、あのテロ屋共をブチ殺すことだけを呪詛のように呟き、面会に来る上官には表情を隠し一日でも早くここから出れるよう画策した。

奴等の喉元を引き裂き、肺に弾丸を叩き付け自分の血で溺れて死ぬ。奴等の大事な人を目の前で焼き殺してやる。

俺は今より修羅となる。

外道の道に腐肉を敷き詰め、奴等の血で染め上げてやる。

その日から俺は、体面ではプロとしての外面を張り、心で鬼を飼った。

全ては復讐の為に。

これからはただ其だけの為に技術に磨きをかけ、どんな些細な情報も聞き漏らさず。

どんな任務だろうよ奴等の影を追い、職務に従事した。

今ではアメリカ軍と共に突入し、部屋と言う部屋全てに突撃する。
誰一人生かしちゃおけねえ、鬼に会えば鬼を斬る、仏に会えば仏を斬る。

俺はそつちには行け無いだろう。

だがそうだと此奴等を生かしては置けねえ。

待っているとも、見て居てくれとも言わん。

コレは俺がしたくてやっているんだ、お前には関係無い。

だから頼む、今の俺だけは見無いでくれ。

「ヘイナオ、今日も頼むぜ」

「…俺は俺の仕事をするまでだ」

「hahaha、頼もしい答えだ。合図と同時に突入だ、ぬかるな」
俺は今アメリカ軍の突入部隊と共にいる、一件のボロい二階建ての四隅にへばり付き突入の合図を待っている。

もうすぐ突入支援の装甲車が来るはずだ。

緊張と冷たい殺意の中徐々に聞こえ出す車両の音。

建物の前面と後方に二台づつ。

ゆっくりと警戒を与えない様、静かに停車。

そして装甲車上部にガナーが建物の方を向き、12.7mmキヤリバーが火を吹く。

対物ライフルの弾丸が雨霰と縦もを削り。

「GO!GO!GO!」

二階が壊滅的打撃を受けている中、四隅に待機していた俺達が突入する。

木板一枚の飛びを蹴破り問答無用の横一連射。

部屋に居た二人を恐怖で凍らせ、素早く腹に一発づつ、上体が起きている一人の眉間を撃ち抜き倒れた敵を蹴り上げひっくり返しバイタルを奪う。

その感にも仲間達が次々突入してくる。

俺は次の獲物を求め次の部屋へ、扉を蹴り開かせると弾丸が歓迎してくれた。

お返しにアップルを一つ安全ピンを抜き、二秒堪えて投げ込む。

一秒ご爆発で白煙がへやを包むがお構いなし。

俺は飛び込み近くで悶えている奴に弾丸を食わせ、首元を引っ掴み前へ。

一瞬仲間と安心した馬鹿の頭に風穴を作る。

応戦しようと撃ってきたので掴んでいた死体を突き出し脇の死角から撃つ。

銃を乱射しながら倒れるそいつを最後に、反対側の扉が開く。

咄嗟に膝を付き構えるも、扉から見えるのは星条旗のワッペン。

俺は一度移動し号令を掛ける。

「クリア、カバー良しカバー良し！」

「入るぞ！」

向こうの返事と共に、反対側から突入した別のチームが入って来た。どうやらこれで一階は制圧出来たようだ、直ぐに二階の掃討に入ったチームからも制圧終了の合図が響く。

特に地下も爆発物も無いまま作戦は終了した。

俺は今、只々殺す為に動いている。

明日も俺は行く、一人でも多くぶち殺す為に。

街並み

街並み

「ふ〜ごつつおさん」

「彼方、よく食べるわね」

「仕方ねえだろ、肉体労働者なんだし。しかも向こうで昼食いそびれたしよう」

今俺とノイは、あの荒屋から歩いて近くの小さな町。

その唯一の宿屋でメシを食っている。

何も泊まりに来たわけじゃ無いんだが、メシが食えるのがこう言った宿屋だけだった。

貧相な村なこと。

「…確かに体付き良いものね、向こうでは兵士が何かだったの？」
何やらジロジロ見て、視姦ですかノイちゃん。

「うんにゃ、大工だ。重たい角材や鉄筋運ぶから、仕事するだけでこの調子さ」

「ふ〜ん、そうなの」

ケンの見た目は黒髪に黒い瞳。

細く鋭いが何処か憎めない感じ。

肌は赤茶に近く、特徴としては華奢な男性の足より太い腕、発達した肩まわり。

身長は170程で、少々ズングリとしているが太っているわけでは無い。

「ところで、こここの事信じてくれた？」

「ふむまあ何つつか、日本じゃないわな。でも言葉は通じる、これが何とも不思議だ」

「その点はまた追い追いね、それじゃあ最後の一押し。ギルドに行きましよう」

そう言うときさつさと勘定を済ませ、外に出て行くウチの幼女。

ちょっと待っても良くない。

「…仕方ねえか」

もう既に外に飛び出したノイを追いかけ、俺も外に出る。

「早く行くよ」

前方5m程に目標発見、追尾します。

とわ言ってもこの村、小さな町なもんで直ぐに到着。

何とはた向かい、近いねえ。

入り口脇でキャンキャン何かノイが言ってるけど、取り敢えずスル
ーでエントリー。

「…ふむ、まあ予想道理」

そこにはカウンターと掲示板、脇で何かたむろってるけどどうせ酔
っ払いだろ。

そのまま直進し、カウンターのおばちゃんが話しかけて来た。

「おや、見ない顔だね。どうしたね」

「うんああ、…ノイチエンジ」

「はあ、分からないのに行かないでよ。…あのですね、ギルド登録
したいんですか？」

「ほいほい。ええと、お嬢ちゃんもかい、それともこの兄さんだけ
かい？」

「取り敢えず2人共お願いします」

「あいよ、それじゃあこの紙に名前書いて、後はその掲示板でも
見ててちょうだいな」

「はい」

ノイは渡された紙を記入して行く、ちよいと脇から見ると俺の分ま
で書いてねえ。

「良いのか。俺書かなくて？」

「良いのよ、書くの名前だけだし。ケンは掲示板でも見ててよ」

「ふう、ケンねえ。まあイイけどよ」

中学生ぐらいの幼女から呼び捨てとか、酷くね。

まあ好きにしてや。

どうでも良い様にヤル気無しで掲示板まで進み、いろいろ見てみる。
ふむ、ゲーム道理ですね。

素材採取に討伐、はたまた護衛や捕縛依頼。

小さな事では庭の草むしりや子供の世話、こう言うのは役所の募集
案内と同じだわな。

何か面白そうで、現実的なあ…

「どう、良いの有ったケン？」

書類が済みひよこりと現れる幼女。

ちみ日本だったらヤバイよ、今頃写メの嵐だぜ。

そんな事を考えながらまず。

「ところで、ノイよ。君は何が出来るん？見たまんま初級魔法とか
無しやぞ」

そう言うのと、心外とばかりに口を尖らせ。

「舐め無いで欲しいわね、それでも攻撃魔法はレベル3よ」

「ですよはああ！お前頭大丈夫か」

ついウツカリ聞き流すトコだったぜ、いや魔法少女とか俺が認めね
えし。

「彼方本当ム力つくわね。イイわよ見せて上げるは私の実力を」

「イイヤ、無理すんなって。うんあれだ邪気眼だろ、厨二だろ、

昔知り合いにいたからもうお腹いっぱい」

そうこういろいろ言ってる間に、何やら一枚紙を引っぺがしスタ
タとカウンターに歩かれる自称魔法少女。

叩きつける様にさっきの紙をカウンターに出す。

「…これ、殺るは」

「でもねお嬢ちゃん、コレは危険よ」

「殺る」

何やら、シャドー。ーン顔負けの迫力で押し切る我等が自称魔法少
女、攻撃魔法レベル3。

カウンターにおばちゃんも何幼女に当てられてんだか。

その後何やら札を二枚握り締め、俺の前を素通り。

取り敢えず見ていると入り口前で、ギラリと睨まれた。
「何してんの。行くわよ」
多怖。

討伐

討伐

その後対して喋る事もなく、ズカズカと歩き続けるノイの後ろに続き、周りをみる。

まだ後ろを見ればあの町が見える、だがそれ以外は見事な原生林。取り敢えず道つばいわだちを歩き続け、そのまま林の中へ。

確かに日本じゃないよなあ、こんな原生林だらけなところなのか？ケン歩きながらここまでの流れを思い出す。

わけも分らずあの荒屋に寝ていて、このノイって子が何か知ってる。

そしてこれまで有った人や食った料理から、ここが日本じゃないのは確かだ。

言語や死んだ俺がなぜ生きているのか、それは後で聞かせると言われたが。

「…気になるよな」

「……何がよ」

「いや別に」

まさか独り言にかいしてくれろと思わなかったんで少しビックリ。

「そつ付いたわよ」

ふむ、湖ですね。

アヒルボートの的なものは無い様だ。

考え事をしながらついて来たから距離は分らないが、町からそう遠くはないな、それこそピクニックには調度良いんでないかい。

林を抜ければ直ぐ、湖自体も普通に綺麗つつかこの透明度、日本じゃ見た事ないね俺は。

「それでノイ、ここで何すんだ？」

「決ってるじゃない、討伐よ。マンイーター狩り」

「…は、マンイーター？人食いですか、どんなんよ」

俺はいまだ信用出来ず、頭の後ろで手を組み怠そうに言つと。

ノイがは無い胸を突き上げ、ビシツと指差す。

「異議あり!!」

「はあ、何よいきなり。あれよ」

あまりに決まっているんでつい叫んでしまったが、その先には。

「何あの露出狂、つうか何かコツチ来たし!？」

ノイが指差す先に、先程までは見えなかったが徐々にこちらに突っ込んで来る集団。

数は5つ。

水面を引き裂き水上バイクで迫ってくるかの様だが、そのような乗り物は確認出来ない。

しかも真っ裸なねーちゃん達、オツパ。見えてっせ。

全体的に緑色で、近づくにしたがい細部まで見えてくる。

トカゲの様な鱗の肌、上半身は水面より上だが下半身は水中。

これで二本足だとやだな、どんなドタ走りよ。

なんだかアバ。ーみてえ。

そうこうしていると先頭の二匹が飛び掛かって来た。

良かった下半身蛇だよ、大蛇だよ。

そんなのんびりアトラクションを見るかの様につたつてっていると、目の前にノイが歩み出て。

「轟け雷光!」

襲い来るアバ。ーに叫びと共に両手をかざす、その時SFバリの雷光が迸る。

耳を劈くような叫びを上げ、白煙を上げるマンイーター。

空中で凄まじい痙攣を見せ地面に没した。

だが、その後ろから上陸を果たした残りの三匹が襲い掛かる。

いちばん近いマンイーター（A）が長い下半身を脈動させムチの様に叩き込んで来るが。

ノイはそれを受け止めるように片手をあげ。

「断ち切れ、鎌鼬」

そう呟くや、突如叩つ切れる下半身。

体液を撒き散らし右へ左へのたうつ、切断された尻尾も打ち上げられた魚のように跳ね回る。

隙を逃さず右脇からマンイーター（B）が食らいつく様に飛び込んで来る。

上半身は人、下半身は5mはある大蛇。

爬虫類独特の冷たい黄色い眼を光らせ、鋭利な牙と刃の様な爪を開き襲い来る。

「止め、土壁」

ノイがとBの間30cm程の間に突如土壁が迫り出し、Bが激突する。

「爆ぜろ」

一瞬白い光が土壁の内部から溢れ、爆発する。

散弾の様に飛び散る礫は、全てBの方向に撒き散る。

土石流並の質量と速度で、Bをスタボロの肉塊へと変える。

最後に残ったマンイーター（C）と、下半身を半ば切断されたAが警戒する様にジリジリと間合を詰める。

互いに牽制し睨みあっている様だが、ノイは半ば遊んでいる。

あれ程の事が一瞬で出来るのだ、睨み合わなくても潰せる。

恐らくは、いかに見せて戦うか考えているんだろう。

俺は何だか白けてきて、ノイの後ろで欠伸をかく。

「はあ、もういんじゃないね。はよ帰ろうぜ」

「…チョット、あんだね」

ノイが呆れ半分でコツチを向いく。

明らかに、見せ付けるような隙。

殺戮本能しか持ち合わせていないマンイーターが、それを逃さず飛び掛かった。

尾が切れたAが低く飛び掛り、その後ろから時間差を起きCが大きく跳んだ。

ノイはチラリと横目で二匹を見て、ニタリ。

低く飛び掛るAに二本指を向け。

「突き抜けよ風穴」

何かタイヤが破裂する様な音が響くと、Aの鼻から上が吹き飛び緑がかった脳みそをぶちまけ、前へ打ち出される。

そのままノイは右脇に一步動き、飛び掛かったCに進路を譲る。

まあ、だろうと思ったよ。

Cは俺に食らいつこうと大口を開け、鋭い爪を突き付ける。

クビを突こうと伸ばされたその右手を掴み、一気に内に入る。

反転して懐に入り、腰を当て、掴んだ腕を両手で握り肩に背負い込む。

中学から習ってる柔道技、一本背負い。

結構軽かったんで右足で馬蹴りのように蹴り上げ、加速度を増し地面に叩き付けてやった。

剥ぎ取り

剥ぎ取り

「うわ！キモ！」

一本背負いで地面に叩き付けるまでは良かった。

「ちょ、チョット！何にやってんのよこれじゃペーストじゃない！」

俺は叩きつけた勢いでもげたマンイーターの腕を投げ捨て、ズボンで手を拭く。

「…チョイとやり過ぎ。つうか何これ？完熟トマトかよ」

その光景は凄惨たるもの。

地面がひび割れ、2m程のクレーターにマンイーターだったものが押し潰されていた。

なんぞ臓物煮込みお頭付きみたいな感じ。

「俺ん家、結構モツ鍋すんのになあ」

「何感傷に浸ってんのよ！とっとと剥ぎ取りなさいよ！」

腕を組み懐かしき家庭の食卓を思い出している俺に、まったく殺戮幼女め俺の純情返せ。

「うんで、剥ぎ取りつて。まさかこれで装備でも作んの」

俺は脇でキャンキャン吠えるノイに、血塗れ臓物と化したマンイーターを指差す。

「こんな低レベルな素材なんかいらないわよ。取り敢えず奥歯四本抜いといて、私向ここの抜いてくるから」

WO　なんてこった、なんたるモン。ン。

なかなか勇気が出ずジツと臓物の上に転がるお頭を睨み、顔が引き攣る。

脇を見れば、ノイは躊躇なくくたばったマンイーターの上顎を踏みつけ口に手をつっ込んでる。

芋掘りの様に引っ張っているが。

「もう！しつこいわね。風よ切れ」

抜けねえからてぶつ切りにすんなよ、魚じゃないんだから。
なんたる惨劇、なんたる猟奇。

「…はあ、ええいままよ」

その後俺も意を決してマンイーターの奥歯を抜き取った。

取り敢えず何も考えず、残骸の眼を見ないよう剥ぎ取りを頑張った。
俺頑張ったよ。

五匹部取り20本、精神的に疲れたのでわたくし只今湖を見ながら
休憩します。

転がした残骸は今ノイがお掃除中、いや良くやるし、良く殺る子だ
よ。

これがここ基準なんだろうか。

「終わったよケン。さて感想どうぞ」

噂をすれば何とやら、手を叩きながら登場、殲滅魔法少女ノイちゃん。
ん。

「そうだな、本当ここは異次元みたいだな。認めるよ」

「ははあん、理解が早くて助かる。でもケン、彼方大分冷静ね」

ふむ、確かに。

今の凄惨を見て、しかも参加までの割には冷静だ。

俺は胡座を組みなおし、腕を組んで少し考える。

そんな俺を見ながらチヨコンと座るノイ。

考えて見るとはて、さて…

……ああ、そうか。

その答えは結構直ぐに出た。

「俺は麻痺ってるんだ、それに現実感も無い」

「それはまだ信じて無いって事？」

可愛らしく小首をかしげるノイに、話を聞いてもらっつ。

「俺は結構向こうではこう言ったゲームや小説、漫画やアニメが好きでね。特にこう言った異次元転生や召喚系はかなりあるんだよ、
一次や二次とか腐るほど」

「…それで？」

ノイ顎に指を当て先を促す。

「設定や思考もそれぞれ。似てるようで似てない、話が違う。そこで俺的答は、すべてを疑っても今現在俺がここに居る、俺は俺だ」

「見た目と違い哲学ね」

「これでも高校は進学校なんだぜ、まあいいやそれでだ。何もし無いで燻るより、ゲームならゲームらしく、小説なら小説らしく楽しもうと結論した」

そう言うのとパンと膝を叩き、ニツと笑ってみせる。

「前向きなのか、諦めなのかはつきりしないのね」

若干呆れられたがまあ良い、俺も半々だ。

「そついや、俺をここに呼んだのはノイなのか？」

「うーん、そこなんだけど実を言うとな私もある意味召喚されたつうか、彼方とペアでこの世界に出現したのよ」

おっと、これは意外だ。

俺的新展開。

「それで主でも無く、相棒な訳ね。それで元は何処？」

どうやら彼女も彼女でイロイロあるんだねえ。

「世界的にはココよ。でも私元は世界を取り巻く思念の一部、デカイと思念意思、漂って居ると妖精や幽霊みたいなモノなの」

ほうほう、それで魔法使いね。

それでまあこの展開だと、肉体を得てここに居るってことが。

成る程、分かります。

「それじゃあ、何で俺とペアって分かるん？それも意識か何か？」

「ああ、それは簡単。私貴方の思考から最後形造られたの」

事も無げに何をほざきますか幼女妖精世界意識。

てことは。

「貴方の考はある程度分かるわよ、この姿も彼方の趣味思考からの抜粋だし」

なんてこった！俺の趣味大爆発だと。

てことは、は！

「俺のエロ本の趣味は！」

「ロリコン魔法少女系、好きな作者は抹茶っ！……！」

「NO……！！！！！」

緊急回避だあ！

俺はそれ以上精神崩壊スペルを喋らさないためノイの口を手で抑え
絶叫した。

俺は心の叫は血涙を流し、轟叫ぶ！

「俺のプライバシー返せえ！！！」

恥ずかしいやら死にたいやら、暴れ狂う羞恥心にのたうち回った。
そしてある程度復活し。

「何故だ！何故ならばな。はさんじゃないんだ！そんなのチェンジ
だチェンジ！」

「もう無理よ、固定化掛かってるし」

「何故だあ！何処の店でも最低三回はOKだぞ！リセットさせてえ
……………」

宿の酒場

宿の酒場

その後納得は出来無いものの、取り敢えず陽もくれ肌寒くなったので、一路ギルドへ。

「…お嬢ちゃん、お連れのお兄さん。どうしたの目え真っ赤よ」

「ああ、気にし無いでください。趣味が特殊なもので」

「そうかい。そうなると私もは聞か無いよ。これ報酬の金貨一枚だけど、銀貨百枚に両替しとくかい？」

「お願いします」

今ギルド内は異様な空気と言つか、ケンから発せられるどんよりとした空気に包まれていた。

彼本人心の中では、寂しい街灯の下、照らされた区域で体育座りで地面にのノ字を書きまくっていた。

泣き腫らした目が痛い。

遠巻きに眺める外野連中も、痛い子を見る様に近づきもしない。

「ほら、終わったからもう行くよ」

そのまま、大の大人が幼女に手を引かれ外に出る。

残されたのは何処か湿っぽい雰囲気と、いったい何が有ったのかといった疑問のみ。

ギルドで金を手に入れた二人は、昼間メシを食った宿で取り敢えず一泊と、晩御飯をとっていた。

円方形の机に突っ伏し、たいして旨くも無いエールをケンは呑んでいた。

向かいに座るノイは、鶏もものトマト和え、湯で野菜とコンソメスープを食している。

酒が入り少しは諦めと現実を認め始めたケンが、やっと帰って来た。

「…ノイよう」

「うん、何？」

「つつ事わだ。その格好は俺の頭にある情報で、自分でカスタマイズしたんだろ。服も」

「そうね、その通りよ。それが何？」

彼はむくりと顔を上げ、酔いが周り始めた目で睨む。

「何で俺の情報引つ張るん。意思があるなら自前で来いよ」

「ああ、そうゆう事」

ノイは一度食べるのをやめ、ナフキンで口を拭き話し出す。

「理由は有るは」

「理由とは？」

「まず始めに私の自我が産まれたのは、彼方の心からなの」

チラリとノイがケンを伺い、彼は先を促すよう目で合図を送る。

「まず当初ココに彼方の魂のみがこの世界に呼び出されたの。それを可能にしたのが私、自我の無い意識だったのよ」

「自我の無い意識、どんな言葉遊びよ」

「まあそれは確かにだけどね。そこで彼方をココに呼べば仕事は終わり、霧散するはずだっ私は、何故か消えずに吸収されていたの。彼方の心、魂に」

何やら難しい話した。

「そこである一定量溜まった時、彼方の思考の渦から私の自我が産まれた。ある意味彼方は私の生みの親よ」

「よせやい、そんな甲斐性ねえよ」

その言葉に恥ずかしいのかそっぽを向くケン。

「ふふ、そして彼方の記憶から基本と成る知識と姿を創り上げた。

その後は私と彼方の肉体が出来るまで、この世界の意識から情報を引き出してたの」

彼はジョッキのエールを飲み干し、お代わりを注文した。

ふむ、まあだいたい理解した。

まっノベル系で近い話は良く有る。

「それで。俺がこの世界の言葉が分かるのは、その意識のせいかな、それともノイが入れてくれたのか？」

「理解が早くて助かるは、オタクって結構博学なのね」

「うるせえ」

お代わりの不味いエールを受け取り、一口飲む。

「答えは私じゃない。彼方の肉体に宿った世界意識のおかげよ、後は分かるでしょこの先」

在り来たりでいけばチートで自動翻訳ですね、わかります。

どうやらこれ以上話す事も無いと、食事を再開するノイ。

はて待てよ、そうか、だからか。

道理で俺の趣味が反応しない訳だ、俺自身もう気付いていたんだ。

「…これから宜しくな。我が娘」

「ふふ、何言ってるのよお父さん。今から呼び名変える？」

「いや、このままでいい」

どうやら一先お先にオヤジになっちゃまったぜ兄貴。

嫁はいないが、娘は魔法少女だ。

どうなるかわかんねえけど、これも運命と頑張ってみるよ。

起き抜け

起き抜け

「（　　）　　）　　．．．zzzzzz」

『グワングワングワングワン！！』

「ぬわああ！」

「やっと起きた、もう昼前なんだけど」
なんだと。

俺の部屋に音響兵器を持ち込む、剩えこの俺様の眠りを覚ますとは。
「ええい！何奴！」

ベットからずり落ち、何とか振り向いた俺の目の前には。

金髪幼女がデカイフライパンと、金属製お玉を装備し、呆れ顔で立っていた。

「なに寝ボケてんのよ。水桶、そこに持って来たから」
ふ、おいおいちょっと待ってくれよ。

確かに俺だって男だ、おにやの子に朝起こされるのを夢見るさ、しかも幼女。

うゝん、プライレスです。

「水の雫」

「オボベオババ！！」

なぜだ！いきなり水責めとな！

THE 逆釣鐘

「ちょっと、本当どんだけ寝ボケてんのよケン」

「ぶゝ、うつす」

そうかあ、やっぱり夢オチとかないわけだ。

昨日訳がわからぬままトリップして、いろいろ有りながらこの宿に泊まったんだつけ。

「うつわあ、マジ知らねえ天井」

「早く着替えてよ、買い物行くよ」

ノイがぶんすかと怒っているが、俺は俺のリズムで行くぜ。
取り敢えずあの超天然素材な服。

…てか着たまんまじゃん。

「おいノイ、着替えろって行ってもこれしか持ってねえけど」

「さっき買って来たのがそこに有るでしょ」

いや、俺知らねえし。

ノイが指差す方、寝てたベツト脇に服が畳んで有った。

ふむ、薄茶のカーゴパンツに黒のタンクトップ、上着は柔らかめで
白めなワイシャツ。

「俺の趣味じゃねえ」

「知ってるわよ。彼方に買わせたら黒一色じゃない、早く着替えて」
なんで俺がこんな爽やかお兄さん風な服装を。

「また陸で溺死させるわよ」

「うんわちョーカッコイイ！マジ趣味良いんすけど！」

何故だあ、何故俺が娘にここまで。

俺は泣き泣き着替え終えると、ノイが俺の格好をチェックする。

「うん。お父さんもやっぱこのくらい身の回りに気を付けてもらわ
無いとね」

「お父さん言うな」

着替え終え、部屋を出た俺は。

初期装備のボロ服を小脇に、ノイと二人で町に出た。

「つかよ。なんなんこの初期装備のTHE布の服、チョーゴワツて
んですけど」

俺は材料が土嚢袋と言われても信じる布の服を広げて、ノイに突き
付ける。

「しかた無いじゃない。あの小屋にはそれしか無かつたんだから」

「カー、しかも拾い物かよ。良いよなノイは。その改造制服は俺の
データだろ」

「あは、解っちゃう。いいじゃない減るもんじゃ無し」

何やら見て欲しいのか一回転、膝上間でのスカートがきまずかたです。

全体的に赤茶いろで、ワンポイントに白いライン。

ブレザーに白いカッターシャツ、襟元に五行星が輝いてた。

「まあ、いいけどよう」

そんな事を喋りながら歩いていると、目的地にもうついた。狭い町だからね。

俺達の前には西部劇のセットの様な二階建て、様は木板で四角く家作ったみたいな建物。

入り口前に、大きめのカゴが二つ。

そうこうしてると、またしてもノイが先走って建物の中に入っていく。

外で待つとく訳にもいかず、後を追う。

「いらつしゃい」

「うつす」

どうやら何かの雑貨屋みたいだな、いろんな物が棚に陳列されている。

店の奥には茶色いベストを着た、アルシンド的なおっちゃん。

若い子にはわかんないかもね。

おっちゃんとカウンターを挟む様に、ノイがいた。

「アレが私の保護者」

「へえ、若いね。髪の色も違うのに、親戚かい？」

「うつん、お父さん」

なにアルシンドオヤジとニコニコ話しとるかこの子は。

俺はこれ以上話をおかしくしない為、つかつかと歩み寄りノイの頭を掴む。

「ちょ、ちよつと！」

「くうらノイ！いちいち混ぜくるな！すんません」

「いやいや、元気で良いん娘さんじゃないですか」

おい、あつさり信用すんなよ。

買い物

買い物

「それで、何か入り様かい？」

お、そうだ、買い物に来たんだけ。

はてえ、何を買えば。

「もう！ちよと放してよ！」

「お、悪い」

つつい頭を掴んでしまったが、そんなに痛かったか。

涙目になってる。

「ふんだ！」

「ほっほほ、仲がよろしいすな」

え！ビックリな反応。

それより、ご立腹でそっぽを向いたノイをどうにかせねば。

だが待て、俺とノイは昨日からの付き合いだぞ、それに女子の機嫌の取り方など知らんしなあ。

俺も困り果て、沈黙が続く。

ブラックアウトしそうな頭を回しているろ考えるが…。

「ふう…もういいわよ。その代わり今日の仕事はケン一人でもらうからね」

何やら我が姫君はご機嫌を治された様だ、これ幸い。

「なんか知らんが任せろ」

「…どうでも良いんじやが、あんたら買い物に来たんじゃないのかい？」

おっとそうだよアルシンド、っていうっかり。

「野外用の外套二つと、背囊一つに肩下げのバック一つ。後毛布二枚に解体用のナイフを二本下さい」

おっ流石ノイちゃん、仕切りやだねえ。

「あいよ。外套は大人用と子供用だね。全部揃うけど、ナイフはど

「うつする？見て買つかね」

「手頃で頑丈なの見繕って下さい」

「あいよ、すぐ持って来るから待っててくれ」

「そう言っと、おっさんは店の裏に消えて行った。」

「ふむ、とうとう旅人装備か。」

「そっちは俺武器持っていないけどどうしよう、昨日みたいに肉体言語じゃなあ。」

「つかマンイーターのレベルが解らん、ノイは低レベルってたけど。」

「なあ、ノイ」

「…なによ」

「おっと、まだちょっとお怒りだ、だが聞かなくては進まんしな。」

「昨日のアレ、どの位のレベルなんだ？強いのか？」

「何やら一瞬目を大きくされたが、少々考え中。」

「まあ、強くモン　ンの蛇竜位だろ。」

「……分かりやすく言えば」

「言えは？」

「村クエのクツ　先生よ」

「おう、こりややつちまつたぜ、あつさり登竜門クリアじゃん。」

「初期装備でしかも素手かあ、どんだけ補正かつとんねん。」

「そんな事を考えていると、アルシンドが荷物を抱え帰って来た。」

「これで全部だ。値段は銀貨六枚でイイよ、他どうする？」

「そう聞くと、俺が挟んでいた布の服を引っ掴みカウンターに出す。」

「なんだ、ついでにゴミ出しか。」

「それじゃあコレを下取りで。ケンは何かいる」

「ああ、古着屋的な感じね。」

「そうだな、出来れば下着でパンツみたなのが欲しいんだが」

「このふんどし、用便するたんび紐が緩むは腰に食い込むやら不便、まさに不便。」

「こっ言つのでイイかい」

「そう言っと、おっさんがカウンター下から白い短パンぽいの見せ」

てくれた。

布もシーン地みたいだし、問題無いな。

「うんじゃそれ三枚。ノイは良いのか、何か嗜好品とか」

「うゝんそうね、蜂蜜飴有るかしら」

「それなら有るよ、三粒で銅貨一枚。この服が引き取りで銅貨三枚だけど下着一枚と交換しよう。それで計算すれば下着二枚で銅貨十枚」

「いやはや、単価が一枚二枚かい。

こりゃ面倒だね。

日頃円や電子マネー、あつてユーロぐらいしか使わない俺には、単価設定があやふやなのはゴメンだ。

「それじゃ蜂蜜飴三十でお願い。これだけ買ったんだから容器はサービスしてよ」

「はは、お嬢ちゃんは買い物上手だね。わかったよ、サービスしよう。合計銀貨六枚と銅貨二十枚だよ」

そう聞くとノイがスカートにポケットから銀貨七枚を取り出し、おっさんに渡した。

これで金の価値が分かるな。

返って来たのは。

はて、あの真鍮の硬貨は幾らだ。

数は真鍮一枚に銅貨三枚、ふむ銅貨五枚で真鍮一枚ってところか、十円より五円が高いのか、成る程ねえ。

そう考えていると、荷物を全部突っ込んだ背嚢を渡された。

まあ、持てって事でしょね。

俺はパンパンに膨れた背嚢を肩に引っ提げ、ノイと二人で店を出た。

I E D

I E D

まったくあの腐れテロ屋共が、舐めた真似しやがって。

その日俺は補給物質を運ぶコンボイトラックの警備に着いていた。車列は先頭に人員輸送用の六輪装甲車、次に二台のトラック、トラック左右と最後尾に軽装甲車が続く。

俺が乗っているのは右脇の軽装甲車、今は車両上部のガナー席で右側面を警戒中。

都市部に近い為、それなりに舗装された三車線道路を走っている。周りには砂の丘と、コンクリート剥き出しの家がちらほら見えるばかり。

車もそんな走っている訳でも無く、どうしても気が緩む。

だが、あの薄汚い面がチラリと見えるたび、握り締めたキャリバーをぶっ放したく為る。

そう、特にああやって遠くから覗く出歯亀野郎共。

眼鏡やビデオカメラ何かでコツチを無遠慮に見て来る、覗き趣味の臆病共。

俺達がテロの攻撃で死に逝く姿を眺め、俺達から振り返り討ちにあったゴミ共がのたうち回る姿が見たくてしょうがないド変態共だ。

奴らが銃を持っていたなら挽肉にしてやったものを。

「Hei、ナオ・ゲイ共の熱い視線に応えてやれよ」

「弾丸で熱いディープリキスなら答えて殺る」

「h a h a h a！ ケツ掘られんなよ」

騒がしくも陽気な声が車内に響く。

今日はメキシコ人とチリ人とで行動している。

言語は皆フランス語、俺も無い頭で必死に覚えたが。

よく使うのは、s l a n g な単語ばかりだ。

そんな下らない会話をしている時、左側から風を切る音が。

視界の先に白線がトラックの前を横切る。

「RPG！」

俺は眼に見えた物がなにで有るかの前に叫んでいた。

敵の無反動砲がトラックの前で炸裂する。

慌ててハンドルを切った前方のトラックが、右後輪を宙に浮かせながら左に急カーブする。

危うく俺が乗る車両がトラックのケツに突っ込むところを、右に抜けるが。

先頭で何か爆発した。

急な横Gに振り回されながら確認すると、先頭の装甲車から黒煙が上がり停車している。

頭が抑えられ急停車するトラック二台。

それをカバーする様に軽装甲車もドリフトしながら止まる。

だが次は最後尾で爆発。

トラックの後方を警備していた軽装甲車が、火だるまとかし横転しながら道路に飛び出る。

クソ！IED（仕掛け爆弾）だ！

俺は罵詈雑言を叫びちらし、キャリバーの装填レバーを引く。

クソ重てえレバーだが安全装置がついてないコイツに、初弾を入れたままだと何時暴発するか解らない。

俺は先ず最初の白線が来たであろうポジションに、弾丸を叩き込む。12.7mmの脈打つ衝撃と、硝煙が俺の鼻腔をくすぐる。

一直線に地面を削り、弾着の土煙や硝煙に視界を妨げられながら、辺り一面ズタズタに引き裂く。

風化しかけたブロック壁が崩壊し、視界に入ったコンクリートマンションに照準を変え決って行く。

「出て来い出て来い出て来い！面出せこん腐れがあああ！！！」
マンションや破壊したブロック壁の周辺から、小さな銃火が傍目き、白い線が頭上を飛んで行く。

生き残った左側の軽装甲車も隣で射撃を開始し始める、車内にいた他の兵士達も遮蔽物に身を隠し応戦する。
よし今のうちに。

俺は隣の軽装甲車ガナーに叫ぶ。

「エマー！」

弾を消費し残り僅かになったので、補給の合図を出す。

「カバー！よし！カバー！よし！」

了解の合図を聞き、車内で散乱した弾薬箱を引き上げ、中のベルトを引っ掴むと糾弾口から垂れる最終弾をベルトリンクから引き抜き、金具を合わせ弾で縫い付ける。

景気付けに一連射ぶっ放し。

「準備よし！」

訓練と、現場で身に付けた軍隊スキル。

如何に安全かつ、最大限の効力を上げるか。

弾丸が飛びくる現場で、教範通りにいくかよ。

クリアリング

クリアリング

ラ ボーじゃないが、止めど無く重機関銃の弾幕を張り敵の反撃を潰していく。

小銃が火を吹けばその現場を崩壊させる、RPGはあれ以来飛んで来ないが潰したんだろうか。

今やテロリスト共が潜伏していたであろうマンションは、壁が崩壊し骨組みばかりが目に入る。

始めの不意打ちからそう時間は立っていないが、後は区域内のクリアリングのみ。

今までの戦闘で足を挫いた兵士とガナーを交代し、俺もクリアリングの兵士達とあのマンションに向かう。

八名二個班に別れ、ガナーの射撃可能範囲を進む。

途中途中、遮蔽物に隠れながら慎重に。

崩壊したブロック壁の下に血溜まりと、吹き飛んだ上半身が転がっていた。

このブロック壁を起点に左右に班ごと別れ、まっすぐマンションを目指す。

マンションとブロック壁の間は何も無く、左右に建築物は有るが、仕切りのように壁が有った。

俺の班は右から一直線に進み、重機関銃で崩壊した壁からマンション内に侵入。

静かに、そして慎重に部屋を検索する。

途中の部屋で、クローゼットを発見。

俺はスリングで下げていたファマスを脇にやり、腰のベレッタを抜きポーチからサイレンサーを取り出し装着する。

本来ならフランス製のパマック、ベレッタのパチモンなんだが死んだ米兵から頂戴した。

サイレンサーを取り付けたベレッタを持ち、クローゼットの脇に移動。

部屋で検索していた仲間達にアイコンタクトを交わし、上段二発中段二発下段二発撃ち込む。

何やら崩れる音がしたので残りの三発を腰より下辺りで撃った。

ベレッタのスライドが開き、弾倉を交換する。

仲間の一人がクローゼットを開けると、ずるりと何か滑り崩れる。

俺はスライドを戻し、初弾を装填したベレッタ片手に、それを蹴り仰向けにして踏み付ける。

ちょうど隣の部屋から、別れた班が侵入して来た。

オマケに、何か汚ねえ髭面もいるが。

なんと無く横目で見ると、その髭が走り寄って来る。

蹴くように両手を伸ばし駆け寄るそれを、俺は条件反射で顎を蹴り上げてやった。

無様に前歯を砕かれながら倒れたソレが何か言っていたが。

「うるせえよ、テロ屋が」

俺は足元に転がるまだ若い青年の死体を、もう一度踏んでやった。

それを見た仲間達は一様に薄ら笑いを浮かべ、髭面は歯茎から出血しながら唾と血を吐く様に叫ぶ。

俺は足に力を入れ、もう一段踏み嘲笑ってやった。

すると、愚かにも転がっていたコンクリート片を掴みバネ人形のように立ちあがるが。

額で煙を上げ、後頭部から内容物をぶちまけ沈んで行く。

「何言ってかわかんねえよ」

硝煙を上げるベレッタをホルスターにしまい、ゲラゲラ笑う仲間達と一緒に、二階のクリアリングを始めた。

その後三階までクリアリングを終え、最上階の屋根でぶるぶる震え命乞いするテロ屋がいたが、叫びを上げながら屋根から飛んで行った。

下を見ると何か呻いている、しぶてえ事。

その後車輛に戻り、応援のヘリと牽引トラックが到着。

初めに殺られた六輪装甲車は横腹に穴が空き、中の八名は蒸し焼きにされ、トッピングに飛び散った鉄片で酷い死にざまだった。

最後尾で火達磨になった軽装甲車も、皆黒焼き。

原爆資料を思い出す光景だ。

ガナーに付いていた兵士は、車外に出ていた半身がもげ内臓をぶち巻きレア、下半身は炭化してウエルダン。

これが戦場だ、まともな奴は一人もいねえ。

天にいらっしやる神様も、本日は地獄の神とストリップバーで眼が放せないらしい。

誰も一様に正義を叫び、聖戦の名の下敵討ちを繰り広げる。

美国が証明しただろ、勝者のみが正義だ。

ギルドカード

ギルドカード

雑貨屋を後にした俺とノイは、またもやあのギルドに参上。

受け付けの脇でパンパンの背嚢を整理して、剥ぎ取りナイフをズボンのベルトに通し右側にぶらさげた。

背嚢に毛布二枚と外套一つに下着三枚、肩下げにノイの外套とナイフ、飴が入ったブリキの箱をいれてやる。

ノイは今受け付けのおばちゃんと話している、おっ帰って来た。

「依頼貰って来たよ」

「オッご苦労」

そう言うのと、手に持っていた一枚の鉄のカードを俺に渡し、同じ鉄カードと布切れをスカートの右ポケットに引っ込める。

…はて待てよ。

俺はそのカードを見ながら、少々気になる事が。

このカードは免許証ぐらいの大きさ、布切れもハンカチ程度の大きさで、確か金は。

「ノイ、さっき店で見た真鍮の硬貨見せて」

「？、イイけど」

そう言うと同じ右ポケットを弄り、差し出した手には真鍮の硬貨。

「さっきの布切れは？」

そして同じ様に、上を見ながら探すように自分のポケットを弄り取り出す。

そうですか、分かりました。

「ノイ、それは四次元か」

「ん？うん便利だから作って見たけどなに」

そうですか青狸ですか。

何か文句あのかと眉をひそめる娘に、父として言おう。

「そんなん有るならバックいらなくね」

俺の言葉に、稲妻に打たれたかのように眼をパッチくりし、しげしげと俺を見て来る。

俺はなんだか勝ったよう気になり若干口角が上がる。

「嘘、私。ケンにつっこまれた」

あて。

「をい、そりやねえだろ」

「あははゴメンゴメン、でもあんまり目立つと悪いからあまり大きいのは入れられないのよ」

「何ともまあ有り勝ちな理由、有難うございます」
取り敢えずいろいろ分かった。

少ない情報で理解する俺様ちゃん、ちょっと凄くね。

受け付け脇から荷物を持って、近くの待合用のベンチに移動し今後の予定を話し合う。

「今日は隣町までの街道を歩いて、途中襲撃してくるモンスターを掃除していくの。数は多い程収入になるけど、ゼロだと私達の信用に関わるから」

「信用つつても、昨日からの初心者だぜ。それに俺は特にこの世界の常識もしらんし」

若干頭を抱え背もたれに体重をかけると、ノイが人差し指を突き付けニコリと笑い。

「大丈夫！私にお任せ。それに信頼なら昨日でもう出来てるから、そのギルドカード」

なんか可愛いから頭をワシヤワシヤしてやる。

まあ、予想はしてたけどね。

昨日ノイが持つて行った札、ソレが何だったか忘れたけど鉄で無かったのは確かだ。

クツ 先生五匹狩ったからランクUPか、早いな。

顔を赤らませ、何やらキャンキャン言ってるノイを解放してやる。

「もう！まったく！考が子供なんだから！」

「ピュワと言ってくれ」

くしゃくしゃになった髪を手櫛で整え、ピョンとベンチから飛び退く。

「それじゃあ、行くわよ」

そう言うとは毎回とつと歩き出す、全く誰に似たんだか。

因みに俺じゃ無いのは確か、基本動きたくねえし。

とわ言っても、やる事無いし付き合いますかね。

「おいノイ！自分の荷物ぐらい持てよ」

そうして俺とノイは町を出た。

出たと言っても柵も堀も無い小さなトコだ、何処から町で何処から外かはつきりし無い。

ここから轍のできた道を四十Km程歩いた先に、目標の隣町があるそうだ。

全くここはモンゴルだよ。

夜間はやはり危険な為、比較的安全な場所で野宿。

予定日数は一泊二日の珍道中、それなりに楽しけりゃいいや。

初探検

初探検

町の外はまあ、町から見える光景と変わらない。

昨日と同じように、草原の中にポツリと家々が立ち、周りは小さな丘。

視線を上げれば白い岩肌に緑が覆い被さっているが、木々は見当たらない、茂みが有るぐらいだ。

木々が生い茂っているのは、昨日マナイーターを狩ったあの湖の周辺とか。

昨日は現実感無く歩いていたせいで、近くだと思っていたけど一駅ちょいとは距離が有るんだな。

「そついや、昨日はどのくらい貰えたんだ？」

早速肩下げから、飴を取り出し転がしているノイに聞いてみる。

「うん？うんとねえ金貨一枚、かなり大金だよ」

かなり大金で、頬に飴ちゃん動かしてあんたりスカ。

「…大体どの位？日本円キボンヌ」

「そうね、大体百万。昨日のは緊急だったし、全滅報酬も込みだったのよ。アレー一匹でもノーマルじゃあ大変だし、徒党を組んで襲ってくるから、この辺りの冒険者結構逆に狩られてたしね。まあそのお陰で報酬はうなぎ登り。あの湖、町の貯水池でも有ったから余計にね」

をいをい、アレで百万かよ。

公園で金の延べ棒GETじゃん、なんちゅう楽勝な。

「その割には反応薄かったぞ。大枚出してる割りに、何も無かったし」

「それは彼方が原因よ」

呆れたように肩をすくめられるが、それには俺がビックリだぜ。

「俺が！？なして！」

「まったく。やり混んでたネットゲーのデータ消えて、あまつさえ秘蔵の同人誌を親に読まれて悲哀の眼にさらされ、超絶絶望したあ！みたいな格好してたの誰よ」

うわ、そりゃ悲惨だわ。

つつかそんな格好のまま連れて行くなよ、ほつといてよ。

つつか俺がオタッキーなのは親知ってつか、その点諦められてるから。

あゝやだ、もう何もしたくねえ。

「ふん、そんな落ち込ま無いでよお父さん」

「はあ！落ち込んでませんけど何か！」

まったく、この子は。

オタクの心喪て遊びやがつて。ノイ、恐しい子。

そんな事をダラダラと喋りながら歩いていると。

遠巻きに何やら動く影がチラホラと、恐らく向こうはたいして隠す気が無いんだろうね。

「なあノイ、あの見るからん貧相な浮浪者。噂のゾッキーか」

俺がしかめっ面で右脇の、両手に枝を握り、匍匐前進してくる不審者を指差す。

因みにこの辺り一面、ほぼ芝生程度の草ばかり。

ささ、ささ、と動く音が悲し過ぎる。

「え？…アラ本当。仕事したく無いけど金が欲しいアウトドア系二ートね」

何つつか、ここで現代知識的な用語がゴロゴロと出て来ると、本当ここ何処よ、実はネットゲーじゃね。

何かしかも増えて来たし、夜中の台所みてえ、もちGの事だな。

「なあノイ、あれも掃除対象？」

「別に。人間狩っても素材になら無いし、カツアゲ程度にしかなら無いわよ」

素材って、まあ確かに人間装備やだなあ、骨で死神作れるけどコッチでどうだろ。

つつかもう俺たち囲まれてね、枝装備アウトドア系二ートに。

面倒臭せえ。

「なあ、軽く炙るか電撃かましてやってよ」

「イヤよ面倒臭い。行けケン！君に決めた！」

キャラ違つくね、何処の猛獣使いな道場破りやん。

「けっけっけっけ。今頃気付いてももう遅い、俺達や木の枝盗賊団。姿無き襲撃者ぞ」

いやいや、だいぶ前から分かるから、しかもなにこのザコキャラ展開。

「なあ…相手しないとダメ？」

「ダメよ」

？クラーク先生ばりに指差すノイの後ろで、俺は盛大に疲れたぜ。

「くくく、気付いたトコで俺達の完璧な擬装を…」

俺は取り敢えず目の前3mくらいの轍で、盛大に悪役笑いしてる痛いおっさんの枝を取り上げる。

「何！馬鹿な！いとも簡単にこの擬装を見破るとな！テメエ何もんだ！」

「…俺帰ってイイ？」

「ダメよ」

三下

三下

俺から枝を取り上げられたおっさんは、跳び上がり後ろに引くと、苦々しく睨んでくる。

その隣に、似た様なのが枝を持ったまま駆け寄る。

「おっオヤビン、バレちまいやしたぜ」

「おのれえ、今まで誰も気付かず、誰からも眼を合わせられなかった完璧なこの作戦が」

「イヤっそこで気付けよ！」

それただ単に、避けられてただけじゃん！

「こうなったら、殺っちまえ野郎共！！！」

そう叫ぶと、俺達を囲んでいた中年共七名が立ち上がった。

手に握った枝を捨て、鉄の板の様なボロい短剣を構える。

「今なら命は、助けてやる。どうする小僧」

「さっすがオヤビン、余裕っす、かつこイイす」

「いやはや、殺っちまえ言って置いていきなりそれかい。

しかも教本通りな太鼓持ち、チープ過ぎてやる気削がれるわい。

「まあいいや、正当防衛だ。かかって来いよ」

俺は嘆息一つ付き、空手スタイルで構える。

「舐めんなやゴラァ！」

血の気だけは立派だね。

叫びながら、子供のチャンバラ並なトロい打ち下ろしが来る。

取り敢えず牽制の左ジョブを…

「あれ？」

距離を測ろうと放った軽い左が、見事にザコAの左頬に食い込み。

「ドウベガ！！」

白目を向いて後ろにふっ飛んで行く。

「テメエ！よくもビリーを！」

イヤ待て、ビックリなのは俺の方って、聞いてくれるはず無いよねえ。

仕方ねえ、穩便に行こう。

空手の構を解き、冗談半分で膝を折り、腰を低く重心を添え。

敵を寄せながら両腕を引き、五指を開き親指と人差し指で円を書く。眼前に突っ込んで来るザコ共に。

「デコぴん百烈拳！オワタタタタタ！オワタ＼（ハオハ）／」

「ヒゲブ！」x6

何の技術も無い、ただ短剣を振り回すだけの中年共は、俺のデコぴんの嵐を面白い程よく当たり。

額にデカイたん瘤を作って眼下に沈した。

「くつくそう！」

「おっオヤビン！ヤバイっす！強いっす！」

ザコボスと腰巾着、その目の前には額から湯気を出し崩れ落ちたザコの皆さん。

「で、どうする」

何かやってて楽しくなった俺は、足元の小石を拾い弾いてみた。

すると、そのザコボスの頬を小石が突っ切って行った。

「おっおおおお！オヤビン血い！血い！」

頬に血が滴り落ちると比例して、真っ青になると。

クルツと踵を返し。

「…逃げるぞ」

言うや早く、ドタバタと走って逃げ出す。

「オヤビン待ってえ！！」

「何っつか。疲れるな」

後頭部に手を置き、精神的に來た首の疲れを解消する。

走って逃げたのは良いけど、この一帯草原ばかりなせいで、常識的な速度で逃げる二人の背中が悲しいぜ。

「まったく！銅貨一枚無いじゃない！」

その声に振り返ると、潰したザコの腰袋を引ったくり、地面にブチ

まけているノイの姿が。

「…何してんの？」

「何って何言ってんのよ。ドロップアイテム探ってるのよ」

「いやいや、ドロップしてねえし！つか強盗じゃん！」

「別良いんじゃないやね、金には困ってねえし」

「ふう、あのねお父さん。この世界は弱肉強食、命が助かっただけ感謝こそされ。身包み剥がされるくらい安いもんよ」

ああ、そうですか。

まあ確かにこいつ等も取り敢えずは犯罪者だし、弱いし三下だけど。何つつか、これが現実何よねえ。

「本当ろくなに無いわね、少しは仕事しなさいよ！」

こらこら我が娘、逆ギレで横は等に蹴り入れないの、何か呻いたじやない。

森

森

取り敢えず気絶している三下連中を、通行の妨げにならなう様路肩に放り。

その後は何も無く歩いていたが。

「……腹減ったな」

何気に見上げた空も、形豊かな雲が食物に見えて仕方ない。

半歩前をちょこちょこ歩くノイも、同じなのか小さく下を向く。

本来ならまず忘れないであろう食料と水。

特に水を忘れたのは痛かった。

なんとか飴をしゃぶり、飢えと乾きを誤魔化してきたが、そろそろ限界だ。

どうすべきか。

有り難い事に少し先に、山へと続く森が見える。

そこで何とかなれば。

いや、何とかせねば。

森へ進むには隣町へにコースと離れる事になるが、このまま強行軍もどうかと思う。

確かに俺一人なら今日中に町へつけるが、ノイには辛ろつ。

良し、決めた。

「ノイ！」

「え、ちよつとう！」

俺は前を歩くノイを、したからすくい上げる様に抱き上げ走る。

「チョット放してよ！自分で歩ける！」

何やら可愛らしく抗議しているが、問題無い。

「はっはっは！子供は子供らしく甘えてろ！ちゃんとくっ付いて無いと引きずってくからな！」

「もう！お父さんの意地悪！」

ぶんすか頬を膨らませてはいるが、首に腕を絡ませてきた。
これなら行けそうだ。

謎の溢れる力を一身に受け、俺は地面を滑空する様に走った。
一蹴り入れる度に身体が前へ前へと弾ける、まるで水切りにようだ。
不思議と疲労や身体の重さ、腕の中にノイも軽い軽い。

地面を低空で飛ぶ様に走り去る。

そんな謎のお父さんパワーを発揮し、目的の森へと突っ込んだ。
勢いが出過ぎて、足ブレーキとドリフトターン。

地面を浅く削りながら停止した。

森の入り口で止まるはずが、気付けば結構深いトコまで来てしまっ
たが、取り敢えず。

「おっしや！新記録！」

「おっしやじゃ無いわよ！」

クビに回した腕で、おもいつきし叩かれたんですけど。

「悪かったよ。少々悪ノリした」

見れば涙を溜めた目が、少し赤らんでいて罪悪感にさらされる。

「うゝ、もうイイから降ろしてよう」

「おお、悪い」

胸に抱いていたノイを、なるべく優しく降ろしてやると。

「おっと」

地面に着いた足が揺らぎ、体制が崩れる。

俺は反射的に身体を支え、周りに何か腰掛ける物は。

「有り難う、もう大丈夫」

「アホ、少し休んでろ」

俺はそのままノイの肩を支え、なるべく綺麗で背もたれになる木ま
で連れて行く。

背負っていた背嚢を降ろし、それに座らせる。

「ほんじゃ、チョット水や食料探して来る。ノイはおとなしくココ
で待ってるよ」

そう言うとか言いたげだったが、人差し指でくちびるを塞ぎ、さ

つと背を向ける。

「すぐ戻るから。何かあったらデカイ音出せよ」

そう言つて、山への道に踏み込んで行つた。

あれからそれなり進んだ。

ここまで突つ切つてきた事で、俺の身体がどうなっているか、主に身体力についていろいろ分かった。

特に顕著なのは動体視力とそれに追いつくスピード。

一抱えある大木を、人參でも抜くようにあっさり引っこ抜いた。

余りの呆気なさに、つい腕に力が入った時。

抱えた大木が、ウエハースのように砕けた。

これはマズイ。

その時足下を白い影が通り過ぎ、少し躊躇したが飛び掛かつて捕まえた。

右手で胴体を掴んだ白いモコモコ、恐らくウサギの親戚筋だろう。

掴んだ瞬間握り潰したらどうしようと思ったけど、一安心。

手の中でもかく、その親戚筋を放してやる。

一瞬立ち止まったが、そのまま茂みへ消えて行く。

変わったウサギだった。

耳とつぶらな瞳、モコモコな毛皮、コレはウサギだ。

だが、ピラニアの様な外に飛び出た歯、それに握った時に感じた強靱な筋肉。

しかもあの肩幅、恐らく見事な逆三角形なボディのウサギだろう。いろいろ考えたが、まあどうでもいいや。

一人で採取

一人で採取

「お！これリンゴだね」

ウサギの親戚筋と別れた後、何やら見覚えがある果物を発見。今回は躊躇無くに握ってみたが。

「ふむ、大丈夫だ」

試しに力をいれてみると。

『バフッ！』

小さな破裂音と共に砕け散り、手の平に果汁のみが残った。ものは試しとそれを舐めてみたが、間違いないリンゴだ。市販の物より小振りで、赤く無く青リンゴだが問題無い。これを持って帰ろう。

木に生っていた青リンゴを、胸一杯に摘む。

出来れば他も欲しいが、少しノイが心配だ戻ろう。

抱えたリンゴが落ちないよう、えっちらおっちら来たみちを戻るから。

気付けば日も暮れ始めている、今日はあそこで野宿だな。

少し急いで帰ると、白く細い煙が見えて来た。

焚き火でもして待っているのだろう。

だが、俺が戻ったその時。

焚き火を前に座っているノイに、大きく禍々しい口を開け飛び掛かる。

あのウサギの親戚筋の姿。

俺は咄嗟に抱えたリンゴを掴み、思いっきり投げ付けた。

ノイは疲れているのか、焚き火をつついていた枝を向けるのみ。

そして俺が投げたリンゴが途中で砕け散り、親戚筋を包む様に襲い掛かった瞬間。

『ジャシュ』

水気を含んだ物を刺すような音と、何か物体が落ちる音が響いた。

「あれ？お帰り」

「お帰りつて、軽いなおい」

と言う訳か、ノイが持っていた枝が一瞬で伸び。

親戚筋を口からケツまで貫き、俺が投げたリング散弾で真横に吹き飛ばされたのだ。

腰掛けていた背囊から立ち上がり、俺の前までよって来た。

「あ、リング有ったんだ。頂戴」

「おっおう。トコロで、あれ、何？」

俺からリングを一つ貰い、頬張りながら指差す方に振り返る。

マッチョなウサギの親戚筋、串刺しスタボロバージョンを見る。

「ああ、あれ。ステロイドバニー。筋っばいけど筋肉増強になるし、血行も良くなるけど。どうする？」

どうするとは、勿論食うか食わぬか。

俺は胸にリングを抱えたまま考える。

どうするにも、捌き方がねえ。

「…俺じゃ無理」

「だよねえ。私も剥ぎ取りは出来るけど、調理はちよつと」

おそらく、これ程まさにな飛んで火に入る夏の虫もそうい無いだろ
うが。

毎日冷凍食品と親の作ったメシなど、自分で調理しないケンには無理な話だった。

「でもこのままにして置くと、他のモンスターが来ちゃうし」

「ウチの兄貴なら捌けるんだけど。取り敢えず埋めておこう」

「そうね」

そう言うのと、ノイが指を鳴らす。

するとステロイドバニーに土が覆い被さり、地面へ消えて行った。

「今の、何？」

「軽い魔法よ。言ったでしょ、私レベル3だって」

「そっぴやそんな事言ってたな」

二人は焚き火の横で、並ぶ様に腰掛ける。

ノイが気を利かせ、背囊から出してくれた外套を敷物にケンは座る。持って来たリングを齧りながら、揺らぐ炎を見る。

「…ねえ。お兄さんで、どんな人？」

「何だよいきなり」

「何と無くね。ケンの記憶の中で、家族の事やお兄さんの事は、特に深いトコに有ったから。名前と顔しか知らなくて」

静かに、木が燃える音のみが響く。

二人は見る物も無く、ただ火を見ていた。

「兄貴は、常に危険な場所に飛び込んでそこに居場所を作っちゃう人でね。漫画みたいな人だよ」

「ケンは、お兄さんと仲良いの？」

「他所の兄弟より仲が良い自身が有る。けどさ…」

そう言っと、静かに空を見上げ、ポツリと。

「今兄貴は、悲しんでるだろうね」

一人で採取（後書き）

申し訳有りません。

暇潰しにでも読んで頂いていた方々には、誠に申し訳有りませんが、この度七転八倒は、今後を左右する学力的な壁にぶち当たり、二ヶ月は拘束される事が決定いたしました。

このものの問題が解決するか、存在意義がピンチになるか。

すいませんが、一時休止させて頂きます。

読んで頂いていた方々には感謝の言葉と、またのお越しをよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2206v/>

Frere

2011年10月9日09時20分発行